

真面目さという戦略

—— 授業と受験勉強打ちこみにみられる性差 ——

小 原 一 馬

The Strategy of Seriousness

—— Gender Gap of Japanese High School Students ——

Kazuma KOHARA

1. は じ め に

われわれはしばしば、「誰某は真面目だ」「誰某は真面目でない」ということを、語る。それは、誉め言葉として語られることもあれば、少し馬鹿にした調子で語られることもある。その言葉の対象は、個人の固有名詞であることもあれば、何らかの集団・カテゴリーについて語られることも多い。そして学校という文脈において、われわれが特にしばしば耳にするのは「女子学生の真面目さ」についてである。

例えば、大学における授業の出席率ひとつをとってみても、平均的にいって、男子学生より女子学生のほうが高いし、試験対策のために学生の間に回るノートも、たいてい女子学生のものである。こうした断片的事実がしばしば「女子学生の真面目さ」という文脈で語られる。

「女子学生の真面目さ」は、ほぼ我々の「常識」になっているといってよいであろう。それは、例えば、「日本の花と言えば桜」とか「日本人は集団行動を好む」、などと同様、人口に膾炙し、「事実」として、当たり前のこととされている。しかし、その実態に関しては、本当に明らかであると言えるだろうか？

たしかに、上に挙げた、大学の講義出席率などは、調べてみるまでもなくその結果は明らかであろう。しかし、高い出席率がそのまま真面目さを意味するわけではない。そもそも、真面目さとは、高い出席率を説明するための原因として、我々が指定しているものである。そこでは、「女子学生が授業に出席するのは、彼女たちがより真面目だからに違いない」という推測がなされている。その真面目さの確認を授業の出席率とするのでは、循環論法に陥ってしまう。

授業の出席率を説明するファクターとして、真面目さ以外にも、いろいろな要素が考えら

れる。例えば、単位の授与において、出席だけを重視する、そうした講義があったとする。その講義に毎回必ず出席するということは、真面目さではなく、その単位獲得の目的意識によっても説明可能である。実際、単位だけを目的にして、講義に参加するともなく、ただただ出席している学生を、われわれは真面目であるとはとはまず呼ばない。

では、そもそも真面目であるとはどのような事態を指すのであろうか。真面目の基本的語義は、二つあると考えられる。ひとつは、本気であること、そしてもうひとつは規範的であることである（山中 1997）。「女子学生が真面目である」というとき、それは後者を意味していると考えられる。ここで、規範的であるということは、その社会集団で良いとされている価値規範に従って行動することを意味する（山中 1997）。重要なのは、二つのポイントである。すなわち、「価値規範に従っている」ということ、価値規範は、「その社会集団で良いとされている」ということ、である。

「価値規範に従う」ということは、パーソンズ（1937）が考えたように目的合理的な行為との対で考えることができよう。つまり、目的に対する手段の制約である（Elster 1986: 23-26）。ある目的——たとえばお金を稼ぐこと——を達成するために、可能な手段は無数にある。そうした手段を無差別に捉え、その中から、目的を達成する上でもっとも好ましい手段を合理的に選択すること。これが目的合理的な行為であり、例えば合理的選択理論などが前提とするところである。しかし、何らかの理由で、こうした選択が自由に行われず、ある選択肢が優先的に取り扱われているように見える場合がある。エルスターの言葉で言う「フィルター」が、選択肢にかけられていると考えられる、そうした場合である（Elster 1986: 23）。他者の行為が、このような枠組みで解釈されるとき、我々はその人を真面目であるという。これが真面目であることの必要条件のひとつであると考えられる。

しかし、それだけでは十分ではない。

ある人を真面目であると呼ぶには、その人が従っている、と思われる価値規範に関して、相対化がなされている必要がある。つまり、その価値規範が、特定の社会集団もしくは個人に限定的なものであると捉えられていなければならない。もしその価値規範が、普遍的なものであると捉えられていれば、そのような価値規範に従っている人を、我々は真面目であるとは呼ばず、誠実な人と呼ぶであろう⁽¹⁾。

以上の分析により、「真面目さ」という言葉は、

1. 目的合理的な行為との対比、特定の価値規範に沿っていること
 2. その価値規範がより限定された集団・個人に属するものであること
- という場合に用いられていることが確認された。

さて、本稿の目的は、この二点が本当に女子学生についてあてはまるかどうか、我々が手にすることのできた、二つの公立高校の高校三年生のデータについて確認することである。

2. 調査の概要、分析方法

ここでデータの性格に関して、本稿の目的と直接的に関係すると思われる点についてのみ、簡単に説明する⁽²⁾。

まず、この二つの公立高校は、同一県同一学区に属している。A校は、本学区で最も偏差値の高い学生を集めており、B校は、それに続く。周囲にこれらに匹敵する私立の進学校は存在しないため、いわゆる「輪切り選抜体制」がここに成立している。ただし、「輪切り」とはいっても、A校合格者とB校合格者の間には、高校入学前の模擬試験の偏差値にかなりの重なりが存在する。同県に所在する中学生対象の某進学塾の資料によると、模擬試験の偏差値から見たA校・B校への進学状況は、次の表1のようになっている。

さて、この二校の高校三年生を今回の分析の対象とすることの大きな理由は、両校の大学進学率がほぼ100%であり、しかも彼らのほぼ全てが、何らかの形で大学受験の準備を行ってきていることである。そのため、彼らが勉強に打ち込むことの第一の目的が、大学受験の合格であるとみなすことができる⁽³⁾。

そうした目的達成のための、直接的な手段となるのが、いわゆる「受験勉強」を行うことであるが、高校側としては、授業の予習復習をきちんとすることで、受験準備も十分であることを謳っている。

だが、今回の調査から、彼らが実際には、〈受験勉強〉と〈学校の授業〉とを別々のものと捉えていることがわかった。これを、次のように解釈することも可能であろう。

つまり、大学受験合格の目的に対する手段に関し、各高校内部における価値規範として、授業に打ち込むということがある。その一方で、この目的に対する、より直接的で合理的な手段として、「受験勉強」に打ち込むことということが認められる。

ゆえに、〈授業に打ち込むこと〉と〈受験勉強に打ち込むこと〉は、一対の〈真面目さの指標〉として用いることが可能であろう。というのも、前者が学校内部の価値規範に従った行動であるのに対し、後者が、外部的基準に即した目的合理的行動であるからである。

表1 A校・B校合格者の入学前偏差値

偏差他	A 高校	B 高校
70		
69	○	
68	○	
67	○	
66	○	
65	○	
64	○	○
63	○	○
62	○	○
61	○ ×	○
60	○	○
59	○ ×	○
58	○ ×	○ ×
57	○	○
56	○	○
55	×	○ ×
54	×	○ ×
53		○ ×
52		○ ×
51		○
50		

(この表は進学塾が、平成3年度の最終回模擬試験の結果を受験高校ごとに一覧表にしたものである。○は合格者が、×は不合格者が存在することを示している。)

以上の理由で、以下の分析では、授業および受験勉強にどの程度打ち込んできたか、という設問への回答を中心に分析を進めていく⁽⁴⁾。

また、ここで用いる統計技法であるが、A.I.C.（赤池情報量基準）というものをを用いている。クロス表分析に関していえば、A.I.C.により、相関のあるなしと相関の大きさの比較が可能となる。紙幅の都合により、A.I.C.の性格について詳しい説明はここでは省くが、ここで用いるA.I.C.値は、次のような性格を持っていることだけを確認しておきたい。① A.I.C.値が-1よりも小さければ相関が存在し、1よりも大きければ相関は存在しない。② 他の条件がほぼ等しいクロス表が二つ与えられたとき、それらのA.I.C.値の差が1以上あれば、A.I.C.値が小さければ小さいほど相関が大きい⁽⁵⁾。

3. 成績および高校生活充実度と、〈授業打ち込み〉との相関の性差

はじめに、〈授業打ち込み〉と〈成績〉の相関関係を示すA.I.C.値を見てみよう⁽⁶⁾。

表2 〈授業打ち込み〉と〈成績〉の相関関係の強さを示す
A.I.C. 値

A 校男子	A 校女子	B 校男子	B 校女子
- 36.22	- 13.77	- 50.71	- 24.43

ここから全ての学校において、「授業に打ち込むほど成績が良い」もしくは「成績が良いほど授業に打ち込む」という相関が見られ、その相関は、A校・B校ともに、男子でより強く、女子でより弱いことがわかる。

「授業に打ち込むほど成績が良い」という方向の因果関係についていえば、男子・女子のあいだに基本的な能力の違いはないとする。すなわち、女子において、男子と比較し、「授業に打ち込んでも成績が上がりにくく」「授業に打ち込まなくても良い成績が保てる」というようなことがないとする⁽⁷⁾。するとこの相関の違いは、男子において「成績が良いほど授業に打ち込む」という傾向がより強いことを意味していることになる。

この相関の性差は一体何を意味しているのだろうか？ 次に、学校・成績ごとに〈授業打ち込み〉の性差を見てみよう（表3）。

表3 〈授業打ちこみ〉×性別（成績下位層）⁽⁸⁾

《A 校》				《B 校》			
	専 念	不専念	合 計		専 念	不専念	合 計
男子	52.0%	48.0%	100% (98)	男子	43.8%	56.3%	100% (80)
女子	67.2%	32.8%	100% (64)	女子	62.5%	37.5%	100% (72)
合計	58.0%	42.0%	100% (150)	合計	52.6%	47.4%	100% (152)

A.I.C. 値 - 1.69
(上位層、中間層では相関関係なし)

A.I.C. 値 - 3.38

このように、成績下位層においてのみ、相関関係が見られ、それ以外では相関関係が存在しないことがわかる⁽⁹⁾。すなわち、男子においては「成績が低くなると授業に打ち込むことをやめてしまいがち」だが、女子においては「成績が低くても、授業に打ち込むことをなかなかあきらめない」という傾向が見られるのである。

このような成績下位層における男女差が、前に見たような〈授業打ち込み〉と〈成績〉の相関の性差となってあらわれているということがわかる。

ではなぜ、成績下位層において、このような性差が生じるのであろうか？ その一つの原因として考えられるのが、成績ごとの〈授業打ち込み〉と〈学校生活充実度〉との関係の構造である⁽¹⁰⁾。

次の表を見てもらいたい。

表4 成績別〈授業打ち込み〉と〈学校生活充実度〉との相関関係の強さを示す A. I. C. 値⁽¹¹⁾

	A 校男子	A 校女子	B 校男子	B 校女子
上 位 層	- 0.67	- 1.09	- 1.32	0.61
下 位 層	- 1.29	- 3.88	1.77	- 3.93
全 体	- 8.44	- 12.96	4.14	- 2.80

まず、充実した学校生活を送るにあたって、授業に打ち込むことが、全体的にいて、女子においてより重要であるということが、この表からわかる。しかも、その重要性は、女子において、成績がむしろ下がることによって高まるのである。

つまり、女子においては、成績が下がれば下がるほど、より充実した高校生活をおくるために、授業に打ち込むことの必要性が高まるということになる。このような傾向は男子にはみられない。

このような、学校生活の充実にとっての〈授業打ちこみ〉の重要性の、成績による変化によって、前述の男女の成績ごとの〈授業打ちこみ〉の違いがある程度説明できよう。

再び、表2に戻る。男子において「成績が良いほど授業に打ち込む」という傾向が強く、女子ではその反対の傾向が強いとするなら、次のことが予想できるだろう。すなわち、男子においては、成績の良い生徒はさらに成績を上げ、悪い生徒はさらに成績を下げる。また、女子においては、成績の良い生徒も悪い生徒も、中間の成績に近づくであろうことである。高校1年時の成績と高校3年時の成績をクロスさせると、その推測が実際にあたっていることがわかる⁽¹²⁾。

どちらの学校においても、高1時から高3時の間に、男子の成績分布が上下に広がっているのに対して、女子の成績が中心に集まっていることがみてとれるだろうか。すなわち、男子においては、高1時の成績上位層がほぼそのまま上位にとどまり、中間層が、上位層・下位層のいずれかに移る傾向が高いのに対し、女子では、高1時の成績上位層のかなりが中間層に移り、中間層がほぼそのまま中間層にとどまっている。

表5 高3時の成績×高1時の成績（行が高1時）

《A校男子》

	上位層	中間層	下位層	合 計
上位層	66.7%	15.6%	17.8%	100% (90)
中間層	31.5%	33.3%	35.2%	100% (54)
下位層	12.9%	18.3%	68.8%	100% (93)
合 計	37.6%	20.7%	41.8%	100% (237)

《A校女子》

	上位層	中間層	下位層	合 計
上位層	53.2%	32.5%	14.3%	100% (77)
中間層	6.3%	64.6%	29.2%	100% (48)
下位層	12.7%	16.4%	70.9%	100% (55)
合 計	28.3%	36.1%	35.6%	100% (180)

《B校男子》

	上位層	中間層	下位層	合 計
上位層	56.9%	27.5%	15.7%	100% (51)
中間層	39.6%	25.0%	35.4%	100% (48)
下位層	15.1%	25.8%	59.1%	100% (93)
合 計	32.3%	26.0%	41.7%	100% (192)

《B校女子》

	上位層	中間層	下位層	合 計
上位層	45.8%	31.3%	22.9%	100% (77)
中間層	12.0%	62.0%	26.0%	100% (48)
下位層	11.5%	23.0%	65.6%	100% (61)
合 計	26.3%	36.6%	37.1%	100% (194)

このことは、高1時の成績ごとに男女差を比較するクロス表を取ってみることで確認される。すなわち、両校の中間層、そしてA校の上位層において、上記のような性差が統計的にも確認されるのである¹³⁾。

ここまでのところをまとめると次のようになる。

まず、充実した学校生活をおくっていると感じられるために、女子にとっては男子にとってよりもいっそう、授業に打ち込むことが必要となる。しかも、女子においてその傾向は、成績が低ければ低いほど高まる。

おそらくその結果として、女子は成績が低くても、授業に打ち込むことをなかなかあきらめない、という現象が起こっている。そのため、女子においては、〈授業打ち込み〉と〈成績〉との相関が男子よりも低くなる。

さらにその派生的結果として、男子の成績は高1から高3にかけて分散化する傾向があるのに対し、女子の成績は中心化する傾向がある。

4. 成績および高校生活充実度と、〈受験勉強打ち込み〉との相関の性差

以上見てきた、成績および高校生活充実度と〈授業打ち込み〉との相関に関する男女それぞれの傾向は、〈受験勉強打ち込み〉との相関においては、すっかり逆転する。

〈受験勉強打ち込み〉と〈成績〉の相関関係を示すA.I.C.値から見ていこう。

表2では、男子において「成績が良いほど授業に打ち込む」という傾向がより強いことが確認されたが、この表6では、女子において「成績が良いほど受験勉強に打ち込む」という傾向がより強いことがわかる。

この相関の性差は一体何を意味しているのだろうか？ 先ほど同様、学校・成績ごとに〈受験

表6 〈受験勉強打ち込み〉と〈成績〉の相関関係の強さを示すA.I.C.値

A校男子	A校女子	B校男子	B校女子
- 21.11	- 22.27	- 18.06	- 24.56

表7 〈受験勉強打ちこみ〉×性別（成績下）⁵⁴

《A校》				《B校》			
	専 念	不専念	合計		専 念	不専念	合計
男子	28.8%	71.2%	100% (59)	男子	25.0%	75.0%	100% (40)
女子	15.2%	84.8%	100% (33)	女子	10.7%	89.3%	100% (28)
合計	23.9%	76.1%	100% (92)	合計	19.1%	80.9%	100% (68)

A. I. C. 値 - 0.29

（その他の成績グループでは相関関係なし）

A. I. C. 値 - 0.30

勉強打ち込み〉の性差を見てみよう。

成績を分割するとセルあたりの人数が減るために、統計的に有意な差は出にくくなるのであるが、両校の成績下位において、男子は成績が低くても、女子ほど受験への打ち込みの程度が低くならない、という傾向が見られるだろう。実際、両校の成績下のグループを足し合わせてクロス表を作成し、A. I. C. 値を計算すると - 2.68 として男女差が有意なものとして確認される。

ここから、女子においては「成績が低くなると受験勉強に打ち込むことをやめてしまいがち」だが、男子においては「成績が低くとも、受験勉強に打ち込むことをなかなかあきらめない」という傾向が確認される。

このような成績下のグループにおける男女差が、前に見た〈受験勉強打ち込み〉と〈成績〉の相関の性差となってあらわれているということがわかる。

次に、成績ごとの〈受験勉強打ち込み〉と〈学校生活充実度〉との関係をみよう。

表8 成績別〈受験勉強打ち込み〉と〈学校生活充実度〉との相関関係の強さを示す A. I. C. 値⁵⁵

	A校男子	A校女子	B校男子	B校女子
上 位 層	- 4.07	- 3.26	0.59	1.88
下 位 層	- 5.19	- 0.83	- 0.44	- 0.13
全 体	- 5.16	- 4.94	- 1.71	1.21

まず、充実した学校生活を送るにあたって、受験勉強に打ち込むことが、全体的にいて、男子においてより重要であるということが、この表からわかる。成績ごとの構造は、B校において、有意な値とならず確認できないが、A校においては予想通りの結果となった。すなわち、男子においては、成績が下がれば下がるほど、より充実した高校生活をおくるために、受験勉強に打ち込むことの必要性が高まるということである。

本節の結果をまとめよう。

まず、充実した学校生活をおくっていると感じられるために、男子にとっては女子にとってよりもいっそう、受験勉強に打ち込むことが必要となる。しかも、男子においてその傾向

は、成績が低ければ低いほど高まる（A校）。

それに連関して、男子は成績が低くても、受験勉強に打ち込むことをなかなかあきらめない、という現象が起こっている。そのため、男子においては、〈受験勉強打ち込み〉と〈成績〉との相関が女子よりも低くなるのである。

このような傾向はすべて、〈授業打ち込み〉に関する傾向と逆転している。

5. 勉強打ち込みのための動機付けの性差

ではなぜ男女で、授業と受験勉強への打ち込みに関する差が生じるのであろうか？ その原因を今回の調査で用意された、勉強打ち込みのための動機付けに関する質問と、実際の打ち込みとの相関をみることで探してみよう。

この調査で用いられた質問は、次の三つである。

① 〈勉強の努力有用性に関する意識〉

（以下〈努力有用〉と略）

「学校の勉強や、受験勉強で努力することは、どんな仕事をする上でも貴重な経験になると思えますか」 1：思う 2：やや思う 3：思わない

② 〈勉強で得られる知識の有用性に関する意識〉

（以下〈知識有用〉と略）

「学校の勉強や、受験勉強で得られる知識は仕事の役に立つと思えますか」 1：思う 2：やや思う 3：思わない

③ 〈模擬試験の結果が勉強の意欲を生む効果〉

（以下〈模試効果〉と略）

「模擬試験の結果（偏差値・順位など）を見たときに、どのように思えますか。次のうちからお答え下さい」 1：競争意欲が高まる 2：競争意欲が弱まる 3：何も感じない⁴⁰

まず、〈努力有用〉と〈授業打ちこみ〉〈受験勉強打ちこみ〉それぞれとの相関の大きさを、A.I.C. 値から見てみよう。

女子では〈授業打ちこみ〉〈受験勉強打ちこみ〉ともに相関関係は見られないが、男子では双方で相関関係が見られる。すなわち、男子においては、「将来の仕事に学校の勉強や受験勉強

表9 〈努力有用〉×（〈授業打ちこみ〉〈受験勉強打ちこみ〉）の相関関係の強さを示す A.I.C. 値

	A校男子	A校女子	B校男子	B校女子
× 授業	- 8.37	2.02	- 10.56	2.25
× 受験	- 2.50	3.53	- 1.62	3.58

強での努力が役に立つ」と思っている人ほど、授業や受験勉強に打ちこんでいることがわかる¹⁷⁾。また、〈努力有用〉との相関関係は、〈受験勉強打ちこみ〉に対するものよりも、〈授業打ちこみ〉に対するもののほうが大きい。

この結果は、男子において〈勉強打ちこみ〉に関し、それが後々の仕事の役に立つという思いが動機付けとして伴うのに対し、女子においてはそのような種類の動機付けが不要であることを示している。また、男子においても、〈受験勉強打ちこみ〉に関しては、〈授業打ちこみ〉ほどには、このような動機付けを必要としないことも同時に示している。

〈知識有用〉と〈勉強打ちこみ〉との関係も、B校においては、これとよく似た相関を示す。

表 10 〈知識有用〉×(〈授業打ちこみ〉〈受験勉強打ちこみ〉)の相関関係の強さを示す A.I.C. 値

	A 校男子	A 校女子	B 校男子	B 校女子
× 授 業	- 18.74	- 1.71	- 8.88	3.95
× 受 験	2.24	- 1.64	- 1.43	3.98

しかし、A校においては、B校と異なった結果が得られた。〈知識有用〉と〈授業打ちこみ〉との関係に関しては、やはり男子においてより大きな相関が見られるが、〈受験打ちこみ〉との関係では、女子においてのみ相関が見られるのである。

この二つの表から分かった結果を一つの表にまとめてみよう。

表 11 (〈努力有用〉〈知識有用〉)×(〈授業打ちこみ〉〈受験勉強打ちこみ〉)の各クロス表の相関関係の強さ

	努 力 有 用 性		知 識 有 用 性	
	× 授 業	× 受 験	× 授 業	× 受 験
A 男子	○	△	○	×
A 女子	×	×	△	△
B 男子	○	△	○	△
B 女子	×	×	×	×

(○=大きな相関、△=小さな相関、×=相関なし)

男子において、「学校の勉強や受験勉強での努力や、そこで得られた知識が、仕事の役に立つだろう」という信念のあるなしが、授業に打ちこむかどうかに大きく関係するのに対し、受験勉強に打ちこむかどうかにはそれほど大きく関係しないことが、この表から読み取れる。一方、女子においては、これらの動機付けは、授業や受験勉強への打ちこみとほとんど無関係であって、しかも、関係があった場合においても、授業と受験勉強とは、これらの動機付けにとって無差別であることがわかる。

最後に〈模試効果〉と〈勉強打ちこみ〉との間の相関を見てみよう。

表 12 〈模試効果〉×(〈授業打ちこみ〉〈受験勉強打ちこみ〉)の
相関関係の強さを示す A. I. C. 値

	A 校男子	A 校女子	B 校男子	B 校女子
× 授 業	- 17.36	- 0.64	- 10.79	3.52
× 受 験	- 18.96	3.15	- 10.18	3.98

ここでは、〈授業打ちこみ〉〈受験勉強打ちこみ〉ともに、女子で相関が確認できず、男子では強い相関、というはっきりとした傾向が読み取れる。

この結果から、男子では勉強に打ちこむ上で、個々の高校という枠組みの外にあり、より広い文脈で通用する「模擬試験の結果」に、心理的にどれほど深く結びついているかがより重要であるのに対し、女子が勉強に打ちこむ上で、そうした外部的文脈は特に必要ないことがわかる。

本節の結果をまとめよう。

まず、男子は授業に打ちこむ上で、その努力やそこで得られる知識が将来の仕事に役立つ、という《意識的な目標》を必要としている。受験勉強と比較してその目的がそれほどはっきりしない、授業への打ちこみに関しては、「それが結果的に後で役に立つ」というような《目的—手段図式》にあてはめられることが、男子にとっては必要なのである。また「大学受験合格」という、目的のはっきりしている受験勉強に関しては、その目的以外に、「それが結果的に後で役に立つ」というような動機付けは、それほど必要でない。

一方、女子においては、〈授業打ちこみ〉〈受験打ちこみ〉のあいだにそのような区別はおかれず、また、そのような《意識的な目標》の必要性自体も低い。

第二に男子にとって、《目的—手段図式》における目的は、「模擬試験の結果」というような外部的基準と結びつきやすい。一方女子においては、〈授業打ちこみ〉〈受験打ちこみ〉は、そうした外部的基準とは無関係に追求される。

6. まとめと考察、そして次なる課題へ

これまでの結果をまとめよう。

第3節と第4節では、充実した高校生活を送る上で、〈授業打ちこみ〉と〈受験勉強打ちこみ〉の重要性が男女で逆転していることをみた。女子では、〈授業打ちこみ〉がより重要であり、男子では〈受験勉強打ちこみ〉がより重要である。また、その重要性は成績により変化し、その変化によって、成績とこれらの打ちこみとの相関がある程度説明できることがわかった。〈授業打ちこみ〉と成績の相関は男子で大きく、〈受験勉強打ちこみ〉と成績の相関は女子で大きい。

第5節では、3、4節で確認された〈授業打ちこみ〉と〈受験勉強打ちこみ〉の位置付けの、

男女間における逆転現象を説明するために、それらに打ちこむ上での動機付けについて、分析を行った。結果として、男子では勉強を、意識的な目標達成のための手段として捉える傾向の強いこと、また、そうした目標は、より外部的な基準と結びつきやすいことが確認された。

この第5節の分析結果はそれだけを見ると、男子との比較の上で、女子の勉強への打ちこみという行動が、第1節で確認された「真面目さ」の二つの条件を満たしているように見える。すなわち、① 行動が、より目的合理的ではなく、② しかも、より内部的な価値に従っている。

そこから、第3、4節でみた、男女それぞれにおける〈授業打ちこみ〉と〈受験勉強打ちこみ〉の重要性の違いを説明することも可能かもしれない。すなわち、男子が〈受験勉強打ちこみ〉をより重要なものと実感レベルで捉えているのは、受験勉強に打ちこむことがより目的合理的であり、それが比較的について、外部的価値基準に基づいた行動だからであると。女子についてはその逆である。

しかし、そのような説明にはパラドックスが存在する。確かに、〈受験勉強打ちこみ〉そのものは、大学受験合格へのための目的合理的な手段かもしれない。しかし、〈受験勉強打ちこみ〉を実感レベルでより重要なものと捉えるようになるということは、意識的な行動ではなく、よって、重要度設定という心理的作業は目的合理的な行動とは言いがたい。また、もし彼らが、このように設定された行為の重要度に従って、受験勉強に打ちこむのだとすれば、その行為の直接の目的は、〈充実した高校生活を送ること〉であって、〈受験勉強打ちこみ〉はその目的に対する目的合理的な行動であるということになる。そして、第4節にみたA校のデータも、〈充実した高校生活を送ること〉という目的達成のために、成績によって変化する〈受験勉強打ちこみ〉の重要度に彼らが敏感に反応していることを示している。このような観点から見れば、〈受験勉強打ちこみ〉が、大学合格へと結びつくのは、その行為の純粋に主観的な因果関係だけを見れば、結果論にすぎない。

同様に、〈高校生活充実度〉に対する〈授業打ちこみ〉の重要性の〈成績〉ごとの構造を所与のものとするなら、女子の成績下位層において、授業に打ちこんでいることも、〈充実した高校生活を送る〉という目的に対する目的合理的な行為であるということがいえるのである。そして第3節にみたデータもこのような推論を支持している。

以上からいえる最初の結論は、実質的には主観的な満足を目的にし、その目的達成において合理的な行動も、本人の主張する目的と行動の客観的な結果によって評価される場合に、非目的合理的な、すなわち「真面目な」行動と受け取られうる、ということである。

本稿で取り扱ったデータにおいて、A校・B校の女子学生が「真面目である」といいうるとすれば、それは、彼女たちが勉強に打ちこむことの目的を、大学受験合格であるとする限りにおいてである。もちろん、そうした指定には、正当な根拠がある。今回実施された調査では、その調査対象の一部と進路指導教官に面接も行っており、学校側のみならず、生徒自らも、彼らの勉強の第一次的な目的が大学受験にあることを認めている。彼らの勉強打ちこ

みの目的が、実際に彼ら自身の訴える通りだとするなら、A校・B校の女子学生が男子と比べ「真面目である」ということは、実証されたといっていよいであろう。

しかしその一方で、彼らの成績ごとの勉強打ちこみの構造は、高校生活充実度に対する勉強打ちこみの重要度の構造の影響を受けており、その意味において、彼らの行動は、生活の充実感という主観的満足度を高めることを目的とし、またその目的に素直にしたがっているだけだともいえるのである。

このような解釈にたって、再び第5節の分析結果を検討してみよう。

第5節の分析結果によれば、男子学生は、外部的な基準に沿い目的合理的に振舞っているとされている。しかしこの結果から、彼らが実際に、外部的な基準に沿って目的合理的に行う選択を行っているのだと考える必要はない。

第3、4節の結果は、別の可能性を示唆している。すなわち、彼らは、内的で実感的な価値基準によって条件付けられることによって、結果的に、外部的な基準に則し目的合理的であるかのように振舞っているのだということである。

女子に関しても同様のことが言える。彼女たちもやはり、内的で実感的な価値基準によって条件付けられることによって、結果的に、内部的な価値基準に則し、規範的であるかのように振舞っているということである。

それでは、彼らを導く「内的で実感的な価値基準」が、男女で異なるように構造化されているのはなぜだろうか？

この疑問に答えるに十分なデータを我々は持ち合わせていないため、ここでは、ブルデューとヴェブレンの理論にのっとり、一つの仮説を提出するにとどめる⁽¹⁸⁾。

この「内的で実感的な価値基準」は、ブルデューの言葉でいう「ハビトゥス」あるいはヴェブレンのいう「習慣」であると考えよう⁽¹⁹⁾。つまりこの「内的で実感的な価値基準」は、それをそなえる個人が、結果的に合理的な行為が可能になるよう、歴史的な過程の中で磨き上げられつつ伝達されてきたところのものである、とする。

この仮説に従えば、このハビトゥス＝習慣には、実践的な合理性が存在しているということになる。それは、自分にとって好都合な自己イメージを他者に印象付けることである。

そのような印象付けの戦略は、「観客」の種類に応じて異なっていく⁽²⁰⁾。その「観客」が不特定多数であり、一人あたりの接触の頻度がより少なく、時間もより短い場合と、「観客」が比較的少数で固定しており、一人あたりの接触頻度がより多く、時間もより長い場合とである。

そして実際、日本社会という文脈において、男子学生と女子学生が、将来的に自身に関するイメージを印象付けるべき対象となる「観客」の種類もやはり異なっている。それは、彼らの地理的移動・社会移動の程度の違いによる。男性の場合、そうした移動量は比較的大き

く、女性では比較的小さくなっている。

例えば、1990年の国勢調査に依れば、5年前の常住地と現在の常住地の都道府県が異なる者は全国で889万人、うち男性は505万人(=57%)、女性は383万人(=43%)であり、男性の移動者のほうが多い⁽²⁰⁾。最も移動の多い20代前半では、移動者のうち男子は64%、女子は36%であり、女子の移動者は男子のほぼ半数でしかないのである。さらにこの年齢層の大卒男子では、実にその39.4%が移動しているのに対し、大卒女子では、その割合は22.8%に過ぎない。そしてこの傾向は、A校・B校の属する県においても変わらない。

また、今回の調査でも、志望校の選択に関して、その学校が地元にあるかどうかを考慮したかどうかを訊ねる設問が用意されていたが、それに「かなり考慮した」「少し考慮した」と回答したものはA校の男子で23.5%に対し、女子では45.4%だった。B校女子では、「かなり考慮した」と答えたものだけでも、32.8%に上るのにたいし、男子ではわずかに8.3%に過ぎなかった⁽²¹⁾。

このように男女間で、その地理的移動・社会的移動の程度に大きな差が見られるとき、それに対応して、他者に自己の能力などの情報を印象付けるための戦略はどのような違いを見せるだろうか？ そのような観点から、「勉強への打ちこみ」という行動について考察してみよう。

まず男子学生の場合、彼らが遭遇し、その能力を印象付ける対象となる「観客」は、多くの場合不特定多数であり、またその「観客」が、彼らの勉強に励んでいる場面に居合わせる機会も比較的少ないであろう。そのような場合、彼らの勉強が行われた過程やその状況を「観客」に伝えることはまず不可能であると考えられる。その結果、男子学生は勉強の過程よりも結果を重要視するようになることが予想される。しかも、合格した大学の偏差値というような、社会の中でより広く流通している、そうした結果をより重要視するようになろう。そのために、彼らはそうした外部的基準に基づいた結果だけを目的合理的に追求するようになると考えられる。

一方、女子学生の場合、彼女らが遭遇し、その能力を印象付ける対象となる「観客」は、より身近な者である可能性が高い。「観客」が、彼女たちを評価する上で、合格した大学の偏差値というような、一人一人の細かな長所・短所とは無関係に規格化され、しかもたった一度の試験という不確実な要素の大きい情報だけに頼らねばならない必然性は全くない。「観客」が、彼女を評価するために用いる情報は、大学の偏差値などといったものよりも、より詳細なものである可能性が高いのである。また、彼女たちに求められるものも、より狭い範囲で通用するようなそうした規範である可能性が高い。男子と違い、彼女たちは、そうした集団を抜け出て、多くの集団を渡り歩くようになる可能性はより低いのである。

そのような彼女たちにとって、所属する集団の価値規範を無視してまで、外部で求められる価値を目的合理的に追求しなければならぬ必然性は特にない。その結果、彼女たちにとっては、より「真面目に」振舞うことがよりよい戦略となるのである。

このように、ここで提示された仮説によれば、女子学生の「真面目さ」、そして男子学生の外部基準に沿った「目的合理性」は、それぞれのハビトゥス＝習慣に基礎づけられていることになる。そして、そのそれぞれに実践的合理性が認められる。つまり、彼らはそれぞれのハビトゥスに導かれることにより、結果的に、合理的な振る舞いをする事ができる、ということである。

そしてそのハビトゥス——、すなわち我々がジェンダーと呼んでいるもの、は最終的には、彼らの地理的・社会的移動量に還元されることになる。

これはすなわち次のようなことを意味する。

我々の社会において女子学生が「真面目に」振舞っているのは、彼女たちの地理的・社会的移動量がたまたま少ないからに過ぎない。

もし女性の地理的・社会的移動が、男性に比べて大きいという状態が一般化しているような社会状況があったとすれば、その状況においては、男性が、女性よりも「真面目に」振舞うことであろう。

このことを確認し、この仮説を確認すること。それが本稿の提起する新たな課題である²⁹。

註

- (1) 多くの辞書は、真面目の語義として、本気であるということのほか、「誠実であること」を挙げているが、山中 1997 の述べるように、真面目であるという語の語用法として、単に、建前に沿った行動をとることも含まれていて、「誠実である」とはいえない場合も多く問題がある。しかし、その山中 1997 も「誠実である」と「真面目である」との違いには十分踏み込んだ分析を行っていない。
- (2) 本稿で扱うデータは、京都大学教育学部教育社会学研究室が 1991 年 9 月に実施した調査からのものである。調査の全体像、データの属性などについて、より詳しくは、京都大学教育学部教育社会学研究室 1993 を参照のこと。
- (3) もちろんこの「みなし」には、本人らも同意しており、その意味で正当な根拠がある。それでもこのことが「みなし」であることを強調する理由は、第 6 節に述べる。
- (4) ここでは、質問紙の間 41「あなたはこれまでの高校生活のなかで、次のような活動に、どのくらいうち込んでいましたか」の「a：授業」と「d：受験勉強」という質問項目を用いている。回答の選択肢は「1：うち込んでいた 2：ややうち込んでいた 3：うち込んでいなかった」である。それ以外の質問項目の詳細については、京都大学教育学部教育社会学研究室 1993 を参照のこと。
- (5) A. I. C. に関するより詳しい説明は、鈴木 1995 を参照。ここでは、従属モデル（相関あり）と独立モデル（相関なし）の差を計算している。
- (6) 成績に関しては、質問紙の間 45 c「あなたの現在の成績は学校内でどのあたりですか」という質問を用いている。回答の選択肢は「1：上 2：中の上 3：中 4：中の下 5：下」である。このデータはこのように、自己申告に基づいているが、それは本稿の目的に適っている。というのも、ここでは、学内における彼らの自己定位からの、〈授業打ち込み〉〈受験打ち込み〉〈学校生活充実〉などへの影響を見ているからである。
- (7) このような仮定をおくことの一つの根拠は、次に見るように、〈受験勉強打ち込み〉と〈成績〉の相関の男女差と、〈授業打ち込み〉と〈成績〉の相関の男女差とのあいだに、逆転が起きているからである。女子において、「授業に打ち込んでも成績が上がりやすく、授業に打ち込まな

- くても良い成績が保てる」がしかし、「受験勉強に打ち込んだら成績が上がりやすく、受験勉強に打ち込まないと極端に成績が悪くなる」ということは考えづらい。ゆえに、この男女差は、〈授業打ち込み〉から〈成績〉へ、という方向への因果関係の強さの差ではなく、その逆の方向の因果関係の差によるものと考えるべきであろう。
- (8) ここで A.I.C. 値は、その値が最小になるように再コードがほどこされている。このような再コードによって、それぞれのクロス表の解釈において、もっとも適合性の高いモデルを選択している。すなわち、「専念」には「打ちこみ」「やや打ちこみ」が含まれている。
- (9) ここで成績上位層とは、問 45 で、1：上 2：中の上と答えたものを指し、中間層は、3：中と答えたもの、下位層とは、4：中の下 5：下と答えたものを指す。
- (10) 〈高校生活の充実度〉は、質問紙の問 42「あなたの高校生活は全体として充実したものですか」という質問に依っている。回答の選択肢は「1：充実している 2：やや充実している 3：充実していない」である。
- (11) 註(8)で述べたような A.I.C. 値最小化の原則に従った再コードが行われている。すなわち、A 校女子上位層では、「やや打ちこんだ」と「打ちこんでいない」を一緒に、「やや充実」と「充実していない」を一緒にしてある。また、B 校女子上位層では「打ちこんだ」「やや打ちこんだ」を一緒に、「やや充実」と「充実していない」を一緒にしてある。それ以外のグループでは全て、「打ちこんだ」「やや打ちこんだ」を一緒に、「充実」と「やや充実」を一緒にしてある。ちなみに、女子上位層の再コードを他に合わせるようにすると、どちらも A.I.C. は 1 以上になる。その場合でも、ここでの分析には影響はない。
- (12) 1 年時の成績としては、質問紙の問 45 a「あなたの高校一年生の一学期の成績は学校内でどのあたりですか」という質問を用いている。回答の選択肢は「1：上 2：中の上 3：中 4：中の下 5：下」である。
- (13) A.I.C. 値は、A 校上位層で - 2.49、A 校中間層で - 10.49、B 校中間層で - 10.89 となる。ところで、このような男子における成績の分散化、女子における成績の中心化について、山口 1995 は本稿とは異なった観点から分析を加えている。
- (14) 註(8)で述べたような A.I.C. 値最小化の原則に従った再コードが行われている。すなわち、「専念」には、「打ちこんだ」「やや打ちこんだ」が含まれている。
- (15) 註(8)で述べたような A.I.C. 値最小化の原則に従った再コードが行われている。それぞれの再コードは以下の通り。
- 成績上位層：A 校男子は「やや打ちこんだ」と「打ちこんでいない」を一緒に、「やや充実」と「充実していない」を一緒にしてある。それ以外は、「打ちこんだ」「やや打ちこんだ」を一緒に、「やや充実」と「充実していない」を一緒にしてある。
- 成績下位層：B 校男子は「打ちこんだ」「やや打ちこんだ」を一緒に、「やや充実」と「充実していない」を一緒にしてある。それ以外は、「打ちこんだ」「やや打ちこんだ」を一緒に、「充実」と「やや充実」を一緒にしてある。
- 全体：A 校男子は再コードなし。A 校女子は「やや充実」と「充実していない」を一緒にしてある。B 校は男女ともに、「打ちこんだ」「やや打ちこんだ」を一緒に、「やや充実」と「充実していない」を一緒にしてある。
- (16) これらの質問はそれぞれ質問紙の問 31、30、27 にあたる。また、〈模擬試験の結果が勉強の意欲を生む効果〉の回答は、2 と 3 のあいだの違いの意味付けの解釈が困難であったため、分析においては、それらを合併して再コードを行っている。
- (17) もっともこのような努力の有用性に関する信念は、認知的不協和を避けるために生まれているという解釈もありえよう。しかし、このような説明付けは少なくとも、彼らの行動が規範的ではなく、目的合理的になされているという印象を与えるのに一役買っていることは確かである。ここではこのような印象付けの行動を重要視する。
- (18) ここで用いるブルデューとヴェブレンの理論に関しては未発表の拙稿「シグナル理論から見たヴェブレンとブルデュー」を参照。ただし、このような合理性の読み取りには、エルスター(1983)のいう「過剰な意味付け」の危険性が同時に存在していることも注意すべきであろう。
- (19) ハビトゥスと習慣の概念の違いについても上記の拙稿「シグナル理論から見たヴェブレンとブルデュー」を参照。

- (20) この分析は、ヴェブレン (1899 = 1961) : 88-91 における、職人と農民の顕示的消費習慣の違いについての分析に依拠している。
- (21) 国民全体の男女構成は、男性 49%、女性 51% である。
- (22) ここで用いているのは、次の質問である。「問 8 : あなたは志望校を決定する際に以下の基準をどのくらいまで考慮しましたか。m : 学校が地元にあるかどうか」回答の選択肢は次の通り。
「1 : かなり考慮した 2 : 少し考慮した 3 : 考慮しなかった」
- (23) 私見では、そのような状況が、私企業において見られるものと考えられる。すなわち、女子社員の派遣勤務、早期退社、転社・転職、パートタイム労働が常態化した状況における、彼女らの外部資格指向や、彼女らと比較しての男子社員の働きぶりの「真面目さ」にあらわれているように思われる。この現象を調査を通じ、実際に確認することが今後の課題となる。

参 考 文 献

- Bourdieu, P. 1979 *La Distinction*, Edition de Minuit (1990 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I・II』藤原書店)
1980 *Le Sens Pratique*, Edition de Minuit, (1988、1990 今村仁司・湊 道隆訳『実践感覚 I・2』みすず書房)
- Elster, J. 1983 *Sour Grapes*. Cambridge University Press
1986 "Introduction" (in *Rational Choice* edited by J. Elster)
京都大学教育学部教育社会学研究室
1993『現代高校生の「受験生活」についての実証的研究』
- 小原一馬 未発表「シグナル理論から見たブルデューとヴェブレン——『気高さ』をめぐる二つの社会学理論」
- 鈴木義一郎 1995『情報量規準による統計解析入門』講談社
- 山口健二 1995「学校における卓越と排除——進学校における二つのジェンダー」『研究紀要 教育・社会・文化 2』: 31-52
- 山中信彦 1997「『まじめ』の意味分析」『国語学』191: 110-98
- Parsons T. [1937] 1968 *The Structure of Social Action*. New York: The Free Press (1974-1989 『社会的行為の構造』稲上毅他訳 木鐸社)
- Veblen, T. 1899 *The Theory of Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, Macmillan Company (1961 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店)